

第12回今後の県立高校の在り方検討委員会 議事録

日 時 平成29年 7 月13 日（木）

13：30～16：00

場 所 サンラポーむらくも瑞雲の間

1 会長あいさつ

皆さん、こんにちは。猛暑の中、お集まりをいただきまして、ありがとうございました。

今、12回と聞いて、そろそろちゃんとした結論なり柱なりを出す時期に差しかかっていると思いながら立っております。

ご案内のように、この委員会では、一つは、個性に応じた多様な学びが希望する進路へとつながっていく高校教育を実現するためにはどのような方策が有効かという大きな柱が一つ、もう一つの柱は、地域資源を生かし、地域活性化にもつながる島根ならではの高校の魅力化や特色化を進めるためにはどういった方策が有効かという、大きな2つの柱に沿って議論を進めさせていただいております。本日は、1番目の個性に応じたという部分を議論したいと思い、次第の中に4つのポイントを掲げております。複数の普通科高校がある都市部の特性や学びの多様性、あるいは規模感というものをどう考えるか、複数の普通科高校がある都市部というのは大変限られておりますので、ありていに言えば松江市、あるいは、出雲市の状況をどうするかということになるかと思います。

先日、別の会議の資料を見ていましたら、県内全体で高校に進学してくる中学校卒業者の数が6,000人を切る時代がすぐそこまで来ている。そして、今、都市部ということがありましたが、松江市でも1,900人台になっているし、出雲圏域では1,700人ぐらいの数になっている。それがいつまでも今の体制でいくわけではないという中で、どういう規模感、あるいは特色を持った学校の配置が望ましいのかを検討する時代が来ているのだろうと思います。その際に、具体的に言えば、中学生に見えやすいような、いわゆるアドミッションポリシーをどう立て、そして、その特色化のためにどのような方策を立て、その中で、どの学校にも今後求められるようなICT化やグローバル化についてどのような方策が考えられるかといったことについても、本日は資料を用意していると思います。

それから、何回か出てきている学校の先生方の多忙感、例えば少人数とか特性に応じたとか、学力に合わせたきめ細かな指導等をやろうとするときに、どうしてもマンパワーが必要になりますので、その部分をどうするかということについて、多忙感が増さないよう、適切な体制を整えてやっていかないと先生方も疲れてしまう。そのことについては6月県議会でもご質問があって、教育長さんがご答弁になっているとおりで思っております。こういっ

たあたりについても少し議論ができればと思い、4点上げさせていただいているところです。

きょうは、かなり盛りだくさんとも言えますが、少し具体的な着地点に向かって皆さんのお考えを自由に述べていただいて、さまざまな角度から議論ができればと思っているところです。限られた時間ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

2 議事

〔資料1を事務局より説明〕

<意見交換>

○委員

中学校からは受検生が出願校を決めるに当たり、積極的に高校見学に参加するという説明があった。オープンキャンパス、高校の先生が中学校へ来て開催する学校説明会のほかに取組があれば教えていただきたい。

○事務局

松江、出雲、浜田、江津の4地区において、複数の学校が合同で保護者を中心とした説明会を一昨年度から開催している。

○委員

教育委員会として、新しい入学者選抜制度を導入され、その変更の目的は達成されたと考えているかお聞きしたい。

○事務局

1年目でかなり様子見の出願が多かったという話も聞いており、この結果だけで成果があったかどうかはなかなか申し上げにくい。ただし、中学生の主体的な進路選択に繋がったという点については、成果として挙げられると思う。

この入試制度がよく理解され定着するまでには、やはり数年かかると思うので、数年後には正式な成果をお示しできるかと考えている。

○委員

通学区外からの合格者数の上限を5パーセントから20パーセントに拡大したということだが、これによって通学区内の受検生への影響はあったのか。あるいは、出願後に1回に限り志願変更を認めたことによる通学区外の受検生への影響はあったのか。

○事務局

志願変更で通学区外の生徒に与えた影響について、細かい一人一人の数字については把握

していない。通学区内の生徒への影響については、把握できる部分とできない部分があり詳細な分析はしていない。

〔資料 2 を出雲高等学校 教諭 大賀学氏より説明〕

<意見交換>

○委員

先生たちが、いろいろな立場で生徒とかかわりながら、ああやって学びを進めていくには、恐らくすごく準備と時間が必要になるだろうと思いながら聞いていた。そういった時間の確保をどう工夫されているのか。また外国人教諭、それからアドバイザー教員とか、いろいろな立場の方たちが出てきたが、全て出雲高校の先生たちなのか。それから、生徒たちが自己評価というか、今の自分たちの学びを振り返って、主体的に学ぶことができているかどうかを評価していたが、生徒たちは自分の学びを振り返って、どういう視点で主体的に学べていると感じているのだろうかと思ったので、そこを教えていただきたい。

○大賀氏

まず、教材開発だが、教材づくりは、教育開発部の約 8 名の教員で、基本、開発している。この教育開発部が作成した教材や指導案を持ち寄って実際に授業をする担当者と具体的にどのような指導方法で授業を行うかを話し合う時間を週に 1 時間ほど授業時間内に設けている。クラス担任がクラスでホームルーム活動をしている時間帯に 3 学年、話し合いの時間を設けている。放課後に会議をたくさん設けると、いろいろなところで支障が出るので、この時間の使い方の工夫は大事である。

それから、アドバイザー教員、ゼミ主担当教員、クラス副担任というのは、全て校内の教員である。外国人教員は、各学校に配属された A L T であったり、教育指導課配属の外国人指導助手であったり、あとは出雲市の国際交流員といった地域の方にも指導をお願いしている。S G H は非常勤講師を雇うことも予算的に可能なので、課題研究が本格化する 9 月から約半年間、2 人を非常勤で雇用している。

外部指導教員とか大学院生は、交通費、謝金を S S H や S G H の予算で支出し、学校に来てもらっている。また、高校から土日大学に出かけたりもしている。

最後に、生徒がどう思い自己評価をしているのか、そのときの生徒の気持ちが多分に影響するので、これは難しい。アンケートをとるときにももちろん教員は誘導していないが、今思うところを 5 段階評価で書かせる形をとっている。ただし、主観的なものであり、客観性に欠けるので、お示しはできるが、本当に因果関係があるのかと尋ねられると厳しい。

生徒自身が、例えば外国語、英語を活用することが望ましいと思うかと聞くと、全員がそう思うと答える。では、一連の課程で、外国語を使ってアウトプットすることに自信がついたかと聞くと、自信がないと答える。すべきかと聞くと、そうだと答えるが、能力はあるかと聞くと、「ううん・・・」と日本人的な謙虚な回答をするので、ここをどうやって客観的に生徒個人に返していくか、評価方法の開発も今後、大切だと考えている。

○委員

3点、教えていただきたい。1点は、SSHとSGHの2つに取り組まれているが、その対象の部分は完全に重なるのか、それとも分けているのか。関連して、1年次のSS基礎はSGHの基礎の内容も含めて設定しているのか。

これも関連するが、課題研究は、基本的にグループで行うということだが、グループはどのような形、方法でグルーピングしているのか、また、グループごとの課題はどのように設定されているのか。

○大賀氏

まず、すみ分けだが、SSHが先行して指定された。当初は、文系、理系に関係なく、全ての生徒に科学的な物の見方、考え方が必要だという設計で行っている。したがって、今行っているSS基礎は、1年生共通で設定している。SGベーシックセミナーは1年生普通科のみに設定しており、理数科には設定していない。2年生、3年生以降の課題研究では、普通科文系はSGH、普通科理系または理数科はSSHという形で区分けしている。グルーピングについては、難しい。文部科学省は、生徒の主体的な発想のもとに課題を設定させなさいと強く言うが、こうするとなかなか話がまとまりにくい。協力いただく外部機関との連携を前提にゼミをあらかじめ学校で設定し、生徒の希望調査をとり、生徒の特性や、いろいろなことを副担任や担任と相談しながら、学校でグループ分けをしている。そうすると、大体、ニーズが近い5人グループができる。とはいいながら、実際にやりたいことと個々の方向性に多少違いがあるのが実情だが、それでも、あえて協働学習をさせているのは、いろいろな仲間、物の見方・考え方、価値観を共有しながら、これは本当にできそうか、できそうでないか、どうやってそれを検証するのか、そういった現実的なものを考えながら課題設定に落とし込むよう指導している。正直、不服な生徒も中にはいるはずだが、それは協力しながら、納得しながら進めるよう指導している。

○委員

最初に育てたい人材像をいつから、なぜこのように決められたのかを聞きたい。あと、先生の負担は相当あると思うが、これを負担増と感じずにモチベーションを上げる仕掛け

があれば教えていただきたい。これを私もやれと言われると相当きついなと思ったので、やはり先生が心からやる気になって頑張らないときつい面があるのではないかなと思う。もう1点、司書の負担もすごくあると思うが、どういう人材が司書を務めているのか教えていただきたい。

○大賀氏

育てたい人物像というのは、私が出雲高校に赴任する前から掲げられていた。恐らく平成22年度ぐらいではないかなと思うが、学校を変えなければならないという当時の管理職の強い思いから、こういう形になったと思われる。その流れの中でSSH、SGHを活用して、教育改革を行ったのだろうと推測している。

教員も多忙を極め、大変さは確かに大変である。一方、約10年置きに学習指導要領は変わるのに、教えるスタイルは全く変わらないのも問題である。本校の取組は将来のスタンダードになるのだという雰囲気づくりか。年によっては4月の最初の職員会議後に研修会を設けている。今、出雲高校がやっている教育開発は、特別な学校がスーパーな環境を整えないとできないことを研究しているのではなく、やがてはどの高校でもできるような仕組みや教材を開発しなさいというのが文科省の指定する研究開発指定校のミッションだと思っているので、そこら辺も考えてやっているつもりである。

司書については、別枠で配属された司書ではなくて、どこの高校にもいる司書である。たまたま、こういった活動に対する意識が高く協力的な司書がいるという現状である。

図書館を利用した授業時数を比較すると、SSHに指定されてから伸びている。去年は521時間、図書館で授業をしている。クラス数が（1学年）8クラスに対し図書室はたった1つなので、本当にフル活動である。

○肥後会長

学校設定教科について、どう位置づけているか。今、学校システム改革会議で言われていることの中に、合科とか教科の枠を超えた学びとか、さまざまな言い方がある中で、今後の高校の教育課程を考える上で、従来の教科枠に縛られない柔軟な教育課程を工夫することによって学力を向上させていくことについて、出雲高校としてはどういう実感をつかんでおられるか。

○大賀氏

学校設定教科というのは、各学校が地域の特性に応じて学校ごとに設置できるもの。既に、出雲高校以外にも学校設定教科を設置している学校はたくさんあるかなと思う。特に地域学習に関するものが多いと認識している。ただ、出雲高校がほかの学校と違うのは、学習指導

要領に縛られない、教科の枠を超えてそれが設定できるというところに強みがある。実際、出雲高校は、必修とされている総合的な学習の時間 3 時間と情報の 2 単位のうちの 1 時間を学校設定教科として、1 年時に 1 時間、2 年時に 2 時間、3 年時に 1 時間、計 4 時間、探究的な学習に情報教育も少しアレンジし設定している。

全国のSSH、SGHを見てみると、家庭科と保健と理科、数学を融合したものとか、サイエンスと英語を融合したもの、社会と国語を融合させたもの、こういったものもあり、これらの結果は各指定校が毎年、報告書を文部科学省に上げているので、あとは、それを文部科学省がどう分析されるかだと思う。

○委員

新しい学びのスタイルであるということを非常に感じた。このSSHもSGHも期限があると思うが、このすばらしい学びのスタイルを今後継続していくために、課題として考えていることは何か。

○大賀氏

個人的な意見として、理数系教育にはお金と人と時間が必要だと考えている。それ以外の交流とか、国際性とか地域性については、ある程度マンパワーで補えると思う。出雲高校は、仮に国の指定が終わったとしても、今のスタイルを学習指導要領の許す範囲で続けるという方向で一致している。金の切れ目が縁の切れ目にならないよう、今、協力していただいている外部人材の方の理解を得ながら、お互いの仕事の首を絞めないようにワークシェアしながら、地元の生徒を育てるという共通理解をいただけるかが鍵かと思う。

〔資料 3 を田邊副会長より説明〕

<意見交換>

○肥後会長

今まで教育成果についても幾つか言っていたが、取り組み始めてからかなりたつので、もう少し具体的な教育成果もつかんでおられると思うが、その辺はいかがか。

○田邊副会長

学力テストの結果を見ると、基礎的なことはかなりできている。応用力、表現力、それから判断力あたりが少し弱いということで、ICTを始めたが、学力があまり伸びないので、今悩んでいる。ただ、児童・生徒が積極的に手を挙げるようになった。このタブレットを使って、3、4人のグループで話し合いをさせてから発表をさせるようにしたことにより、積極的に発表するようになったと思っている。議会で時々、学力アップのために入れたのに学

力が上がらないと言われるが、なかなか急には上がらないので、もう少し時間をかけてやりたいと思っている。

今はどの教員も積極的に授業で使っている。例えば体育では、長距離の練習をするときに、自分でタブレット上に設定タイムを入力する。自分がゴールした時に、何分早くなったとか何分過ぎたということが自分で把握できる。児童生徒の積極性が出てきた、教員も積極的になったということが今のところ一番の効果ではないかと思う。

○肥後会長

大事な点で、必ずしも学力テストの学力だけではないので、意欲にしろ、学習に対する前向きな姿勢にしろ、さまざまな効果が考えられるので、その辺を検証していただきたいと思う。同時に、ICT教育一般に言われることだが、子供たちが何でもかんでも座って調べようとするが、こうした実体験の欠如こそ学力低下のもとではないかという意見も最近出てきているので、そのあたりがどうなのかを今後考えなければいけないところだと思う。

〔資料4を事務局より説明〕

＜意見交換＞

○委員

ICT化という場合に2つの意味合いがあるだろうと思っている。1つは、学校の施設や情報網、例えば校務支援システムなどを機械化する場合、もう一つは今説明があったように教具を機械化していく場合の2つがある。これを一緒に論じると混乱するが、後者の部分で話をすると、タブレット活用は、通常学級における個別学習や特別支援教育で確かに効果的だということが報告されている。ただ、今後、機器等がバージョンアップしていくときに、予算、財源的に対応できるか。少し大きな自治体になると財源がなかなかついてこない部分もあるのではないかな。また、現場で、例えばタブレットがフリーズしたときに、そういう処理を誰がどうやってやるのか、そんなことに担任が気をとられてやらなければならない場合もあるのではないかなと思う。

もう一つは、授業でタブレットを過度に使うことについて、個人的に思うところがある。確かに立体的な映像を示すには大変有効だろうと思うが、例えば教師が教師自身の言葉で、教具の工夫を伝えなくなる心配があるのではないかな、そういった弊害もあるし、それから教材研究がいわゆるソフト研究や器具の活用能力を向上させることに移行していく心配があるのではないかなと思っている。自分が指導するのではなく、わかりやすい説明を探し、それを主張させるといった感じになるのではないかと危惧している。トータルとして、生徒も在宅

で通信教育を受けるようなイメージがもたらされるのではないかとと思っているし、サテライト講義みたいな形にならないように、効果は効果として生かしながら、そういう点にも十分注意をしていく必要があると思っている。松江市は今3点セットで、スクリーンとかプロジェクターの整備を進めているが、財源の問題があって、急には進まない、時間をかけて進めようと思っている。

もう一つ話しておきたいのは、校務支援システムをICT化していくということは非常に良いことで、長時間勤務のこととも深くかかわってくるだろうと思っている。松江市も出雲市も単独整備したが、全県同一に整備していく必要があると思っている。

○肥後会長

ICT機器の活用についての大事なポイントを押さえていただいた。現場の教員が、自分が生身で教えていることの意味をしっかりと自覚しないと、30年後には教員という仕事がAIに取ってかわられるということになりかねない、そういうご指摘だったと思う。

〔資料5、6を事務局より説明〕

<意見交換>

○委員

幾つかの教育委員会では、入試における志願倍率の目標設定があると聞いているが、島根県は、志願倍率を意識されているのか、されていないのか教えていただきたい。

○事務局

本県の学級数については、地元の中学生、あるいは卒業生数、そして、いわゆる志願倍率等を総合的に踏まえて設定しているが、入試の志願倍率の目標について、県教委は基本的には確固たるものは持ち合わせていない。

○委員

昭和43年に松江北高校に理数科が設置されたと思うが、50年近く経った今、この理数科をどのように評価しているか。

もう一つ、例えばここ10年ぐらいのところで、通学区制の設置、廃止をした自治体で、中学校卒業後の進路がどう変わったか、実態調査をされたことがあるか。

○事務局

理数科の設置目的については、その役割を十分果たしてきたところであり、現在もその役割を果たしていると考えるが、全県的に理数科の志願倍率が上がってこないという事実もあり、その辺は課題として捉えている。

各県の状況を詳細には調査していない。福岡県教育委員会が平成25年度に調査した結果によれば、中国地方では鳥取、広島、山口の3県が通学区を撤廃しているが、鳥取、広島は、調査に対し、志願状況に変化はなく、高校の活性化・特色化に成果があったと回答されている。

○肥後会長

さきほどの委員の問いは、深いものがあって、理数科の教育実績をどう考えるかという問題は、何を捉えればそれが評価できるかという問題でもある。これまで多くは、どこの大学に何人行った程度の話しか出てこないが、そうではなく、その後、卒業生が社会的にどのような領域でどんな活躍をしているかというところも当然大事である。卒業生の実績について、難関校への進学だけで評価されても困るところがあるので、もう少し違う捉え方をすることが大事である。

理数科教育そのものは、倍率が今回下がったからということだけではなく、50年前に設置したときと社会的な使命も多分変わってきているので、リニューアルするとしたらどういう意味でリニューアルしたら良いのか。逆に言うと、理数科だけではなく、ほかに設置が望まれている特色のあるコースもあるのではないか。そのあたりをここで議論していく必要があるので、各委員の忌憚のない考えを聞かせていただきたい。

これまで普通科高校においては、文系、理系という言い方をしてきたが、大学入試と緊密にかかわっているので乱暴な議論はできないが、これまでどおり文系、理系のような言い方をするのか。理数科ではないものを考えるとしたら、先ほど出雲高校の取組で「探究型」という言葉が出てきたが、そういった学科の設置も必要かもしれない。学科ではなく、コースかもしれないが、そういうさまざまな特色のある学びの学科、コースを考えていかなければいけない時代かもしれない。

○委員

やはり子供たちが今後の進路選択をしていく上で、希望する進路に進むために学ぶことができる高校を選んでほしい、その選択肢を広げてあげたいというのが保護者の願いである。

そうしたときに、まず1つ、通学区の問題があるが、松江市内の現状を考えると、この通学区が本当に必要なのか常に疑問を感じている。なぜそう思うようになったかというのと、例えば東高の校区の生徒は、かなり遠くから通ってくる。松江四中校区の生徒の保護者と話していても、通学の距離(時間)が長く、子供たちが大変な思いをしていて、通学区があることで子どもたちの負担を感じる場面が多い、といった話がされている。通学の距離に限らず、本当にこの通学区の在り方が、子供たちの選択肢を広げているのかと考えると、疑問である

と保護者として正直なところ思っている。

また、“子供たちの選択肢を広げる”という視点で考えたとき、各高校がもっとわかりやすく、自分の高校の魅力を発信していただきたいと強く願う。

きょうの資料の中に、松江・出雲ともに求める生徒像が書いてあるが、どの高校も似たり寄ったりで、特色が全く伝わってこない。子供と話をしても、どこの高校も各校の特色がよくわからない、学校のパンフレットを見ても、レイアウトはほぼ同じで、何が魅力なのか伝わってこない。この学校に行ったら何が学べて、どういう進路に進めるのか知りたいと思ってパンフレットを見ても、進学先は書いてあり、その点は理解出来るものの、このままで良いのかと客観的に思う。もう少し各校が魅力的に情報発信してほしい、生徒に伝えてほしい。オープンキャンパス、学校説明会、決まり切ったことが毎年行われているが、その点も改革するときではないか。オープンキャンパスのときに部活動見学等があるが、学校説明会時に、在校生と触れ合う場がもっとあっても良いのではないかと思ったりもする。

最後だが、各高校が特色を発信することで、地元企業とつながることが出来た例をお話したい。松江市立女子高には観光文化コースがあり、その高校が何をしたいのか上手に発信されている。そのおかげで、地元企業としてその学校とともに、地元の高校生たちの成長(経験)に関わることが出来るのでは、と気づけた。そして、私たち地元企業は女子高の生徒たちと一緒に商品創りをしようとひらめき、観光文化コースの生徒たちと一緒に、半年間をかけて観光土産のお菓子を商品化し、実際に売り場で販売を開始している。普通科高校の話のときに、例に出して恐縮ではあるが、今後の県立高校の在り方の中でも、各校が上手に魅力発信することで、地域とつながり、ともに島根の高校生たちの成長をサポートすることが出来ると思っている。

○肥後会長

非常に重要なところをまとめていただいたと思う。資料6に、これまでの通学区制を維持するという結論に至った根拠について、「松江市内3校は互いに切磋琢磨し合うことで、進学や部活動などですぐれた教育成果を上げてきた」、「通学区制を撤廃した場合、特定の高校に志願者が集中する可能性がある」、「3校の序列化、ひいては今まで培われてきた3校による切磋琢磨の成果が失われることが懸念される」といった書き方がしてあるが、この点についてはどう思うか。

○委員

もし通学区を撤廃したら、特定の高校に志願者が集中する可能性があるということが書かれているが、当時は、少なくとも松江3校は、いわゆる等質等量の教育を行っており、した

がって、通学区制は意味があるという結論だったと思う。それを現時点でどう考えるかという課題ではないかと思う。

○肥後会長

ある意味では、等質等量であることそのものを今問題にされていて、先ほど委員が、2番目に発言のあった、同じようなアドミッションポリシーを掲げるのであれば、今後の子供の人口を考えると3校も必要かということになる。違う意味での魅力化という言葉が使われたが、独自のアドミッションポリシーを出すということ、本当は独自の魅力ある教育課程を持つということに多分なると思う。教育課程の独自性を出さないと、普通科高校だから、大学受験を基本とする文系、理系の教育をしていきますということであれば、3つの学校が同じようにあるということにしかない。今後それで良いかということについて、私たちがどう考えるかということについて意見をいただければと思う。

○委員

普通科高校で特色を出せというのは非常に難しくて、まず1つは、中身の見せ方。上手に生徒の活動の様子を見せることは、受験を考えている中学生の心を引くことにはつながると思うが、それは見せ方の問題であって、実際中身はそう変わらない。だから、特色づくりということは、イコール教育の中身を変えるということ、そこを覚悟してやるかどうかということだと思う。

理数科は設置して50年たっているが、1つは、やはり今やっている探究活動とか、外部とつながった教育のいわば先駆けであり、そういう意味で、理数科の価値はあり続けたと私は思っている。それが今、理数科以外でも探究的な活動が始まり、外とのつながりができてることから、変わらないのではないかという考えが出てきたのではないかと思う。これまでの歴史の中で、全く価値がなかったということではなく、むしろ今のような動きを理数科は先導してきた。もう一つ、SSHのような特に理系に特化した授業を導入する際に、理数科が設置されている学校は非常に取り組みやすかった点で、理数科の価値はそれなりにあったと私は理解している。

これは内部的な話かもしれないが、理数科は3年間クラスが変わらない。そこがまた高校の3年間を同じクラスで過ごすという、理数科らしさを醸し出してきた。

○委員

理数科から外れるが、出雲高校に理数科が設置された時に、大社高校は理数科をつくらずに、体育科をつくった。当時の校長は、理系は普通科でもいけるので、体育系の教員、警察官そして消防士をつくる学校として体育科をつくったという説明をしている。

40代、50代以下の出雲地方の警察官の大半は大社高校出身であり、役割を果たしている。

先ほど出雲高校の取組の説明があったが、課題探究型学習については、松江北高校でも、理数科、普通科ともに取り組んでいる。ただし、あまり予算がないので、どこまで出雲高校と同じようなことができるかという問題はありますが、SSHの先取りを理数科と普通科で実施している。

先ほど、普通科高校は差がないのではないかという話があったが、確かにそういう側面は現実にある。ことしの学校説明会で、うちの学校は、同じような目標を持った生徒の集団だという話をした。同じ仲間がいるので、その仲間に励まされて、そしてその仲間を励まして、それぞれの進路に向かっていくという話をした。恐らくどこの普通科高校でもそういう話はされると思うが、その辺が中学生には響くかなと思っている。

○肥後会長

普通科高校では教育課程のつくり方に大差がないので、文言の上で特色があるように書いても、教育課程は変わらないという話になるが、それで良いのかという話が出た。

先ほどの出雲高校の説明の中で、総合的な学習の時間と情報の時間をくっつけて学校設定教科を設定しているという話があったが、ほかの通常の教科については手がつけられない状態があり、また単位制の問題がある。合科的に教育を行うようにといった次期学習指導要領に向けて、国の高大接続システム改革の中で、どういうテクニカルな工夫ができるのかという問題を研究する必要があると思うが、県でも特色のある教育課程を研究しながら取り組んでいく必要がある。それは何のためかということ、わかりやすい進路であるとか、生徒がなりたいたいものへ向かって、ここならこれになれるという特定の職業を指すかどうかはともかくとして、どういうところに行きたいかについての目標値を明確にしながら、特色のある教育課程をつくっていく。それによってアドミッションポリシーが特色化されて、中学生にわかりやすくなる。ここに行ったらほかではないこういう時間をこういうことに使えるというつくり方をして、従来の教育課程のつくり方とは異なる工夫がどのくらいできるのか、これをやらないと特色化という話はどうしても看板だけということになりかねない。

○委員

私も求める生徒像を見て、これで選べと言われても結構きついと正直思った。そういう中で出雲高校の説明を聞き、明確な学校方針があり、おもしろいと思ったが、話を聞いていて、一つ危険だと思ったのが、魅力を発信する中で、先生の負担の限界を超えてまで生徒を集めるために、学校間の競争が過多になるとおかしくなると感じた。小学校・中学校・高校・大学の中の高校という役割を私たちは考えて提案しないと、過当競争になってしまう、みんな

疲弊してしまうおそれがあると思った。その役割というのは、生徒の成長過程における役割分担があり、地域の中での役割分担もある。高校にはこういう役割が必要だということをしっかりと定義づけしないと、先生も苦しいし、何か不幸なことになるのではないかと思った。

もう一つ、学校方針を誰が決めるかという問題があると思った。校長も教員も異動する中で、誰が責任を持って学校の方針を決めるのか、結構難しい制度設計なのではないかと思いながら話を聞いていた。あと理数科にも通じるが、多様な魅力的なコースをつくるのは良いと思うが、つくればつくったほど、選択を間違えた時のセーフティーネットをどうするかも同時に考えておく必要がある。これからの高校の特色づくりは絶対にあったほうが良いし、こんな生徒を求めていますというよりも、ここに入ったらこんな力が身につきますというアウトプットのほうを出して行ってほしいという思いはあるが、役割分担、学校方針を誰が決めるのか、セーフティーネットについて考えないと、不幸なことになりかねないと感じた。

会長に伺うが、先ほどの倍率問題、私も気になっていて、教育委員会の見解がないのは、ある程度仕方がないことかと思うが、一般論として、教育界の中で倍率をどう捉えているのか伺いたい。

○肥後会長

専門ではないが、大学の場合は3倍を割ると競争力のある試験ではないと考えられている。大学入試の倍率も上げようと努力しても、そこには一定程度限界があるのではないかと、もう少し違う意味でのクオリティーの勝負をする必要がある。例えば志願者数に対して募集人員を減らせば、一瞬は倍率が上がるが、それは瞬間風速でしかなく、次からまた調整が働いてイタチごっこになる。だから、その辺も考えなければいけない。

○委員

普通科高校では教育内容で差がつけられない、これはそのとおりだと思う。他地域のいわゆるトップ校ではそれなりの倍率、1.4とか1.5を切ったら質が確保できないと言われている。そういう観点では、等質等量という考えはない。逆に、それぞれが特色を出すということであれば、一定の競争率がある学校もあれば、そこまで高校に入るために勉強したくないという生徒も当然いると思うので、あくまで等質等量なのかということを知りたいと、さきほど質問した。

○肥後会長

そのことを、前回の通学区域検討委員会の答申では序列化という言葉を使って避けていた。一定の志を持って勉強するという生徒を集めるためには、3倍という倍率を例にして考えるなら（非常に乱暴な話ということをお断りした上でだが）募集定員を3分の1にすれば済む。

同じ定員で3倍になることはあり得ないので、募集定員絞るということになる。

○委員

一つ付け加えたいが、さきほどの高校の役割というのは、厳密にいうと県立高校の役割ということで、私立高校の役割分担も含めて、きちんと考えて提案したほうが良いと思う。

○委員

等質等量というところが、最初に言われたときからずっとひっかかっている。いろいろな地域にいろいろな高校があるが、どの高校に行っても、松江市内は別として、必要な教科の力とか、身につけるべき学力がつけられるようにあってほしい。今もそうだと思うが、例えば定員の関係で化学の先生が減になれば、進路選択にかかわってくる。県内どこの普通科高校に進学しても、必要な教科の力、身につけるべき力が付くと良いと思ったことが一つ。その上で、地域の生き残りだとか、その学校が地域の中にずっとあり続ける、そこにあるということを踏まえて、各学校で、この学校ではこういうことができるといった学校のPR、あるいは魅力化を進めていければ良いと感じた。

○肥後会長

次期学習指導要領では、どこの高校を卒業しても、高校生として身につけておくべき資質・能力をコアと位置づけ、高校卒業の一つの目標に定めている。もちろんその中には基礎的な学力の三要素も入っているが、そういった目標は既に掲げられているので、そのことは当然ながら保障しないといけない、その上での特色化について話を進めてきたし、今後も進めていく必要がある。

3 閉会あいさつ（片寄教育監）

それでは、長時間にわたりありがとうございました。いつも思いですが、私どもがふだん持ち合わせない新たな違う視点でのご意見も多数頂戴いたしまして、いつもながら勉強させていただいていると思っております。また、本日はところどころで我々にとって追い風となるようなご意見も頂戴いたしましたこと感謝申し上げたいと思っております。

次回、9月まで暑い日が続きますけど、皆様ご自愛いただきまして、また9月の会で再開できますようにお祈りしております。本日はどうもありがとうございました。